

< 2018年 8月 >

古賀 順子

「アジュール・フロタン(避難船)」の受難

今年2月10日土曜日午後、ル・コルビュジエが改造した石炭運搬船「アジュール・フロタン(避難船)」が沈没して六ヶ月が過ぎた。

第一次世界大戦後、パリに石炭を供給する引き船として1919年建造されたコンクリート船。1929年、フランス救世軍の依頼を受けたル・コルビュジエ(1887-1965)が改造し、ホームレスを収容するセーヌ川に浮かぶ避難所となった。ル・コルビュジエ財団の表記では、「長さ80メートル。パリ河川局の許可を得て、三つのコンパートメント形式を取っている。160床のベッド、食堂、厨房、トイレ、洗面台、シャワー、ディレクターの部屋、船の操縦士の部屋、屋上庭園を備える。冬はルーブル宮前の河岸で宿のない人々や橋の下で生活している人々を冬の寒さから守り、夏はバカンスに行けない家庭の子供たちの活動に役立てられた」。

救世軍がこ船を売却したのが2006年。以来、新たな船主たちによる修復が続き、船としては初めて文化財に登録された。今日の安全基準をクリアし、一般の人々を船内に受け入れ、マルチ利用型の文化発祥地として新しい船出を待っていた。日本のステンレス企業「アロイ社」から寄贈される2機の栈橋設置を予定していた矢先の事故は、関係者一同に計り知れない大きなショックを与えた。

通常は穏やかに流れるセーヌ川も大きな水害を起こすことがある。

1910年1月28日最高水位8,62メートルに達したセーヌ川は氾濫し、パリ市内を水に浸し、水が引くのに35日を要した。サンラザール駅前をボートで移動する人々の写真など、水害の規模を今日に伝えている。最近では、地球全体の異常気象を証明するかのようになり、2016年6月6,10メートル、今年2018年1月末6,10メートルと頻りに増水している。歴史的な増水を体験してきたルイズ・カトリーヌ号だが、水が引き始めた2月10日、船尾が岸の金属に衝突し沈んでしまっ

たのだ。

六ヶ月過ぎた今も、船体は水面下である。事故直後は、ル・モンド紙、フィガロ紙、テレビなどで大きく報道されたが、時間が経つにつれ忘れられつつある。船の文化財は珍しいが、フランス国内で30万を超える文化財を思えば、重要度が高いとは決して言えない。文化財であるがゆえに、何をすることもパリ市とパリ河川局の許可を取らなければならない。再浮上にかかる費用も最低10万ユーロが必要で、迅速な対応が難しい。そんな中、8月15日付け「ノイズ、街の噂 (Noise le bruit de la ville)」に現状報告の記事が掲載された。「ノイズ」は2011年スタートしたアソシエーション組織のメディアで、文化を中心に話題のイベント、記事を投稿できる参加型。「ル・コルビュジエ作品の沈んだ部分」と題した記事が現状を伝えている。

「パリのオーステルリッツ岸に繋留されている引き船「ルイズ・カトリーヌ号」が水に沈み六ヶ月が経過した。今から約90年前に建築家ル・コルビュジエが改造した歴史的建造物であるこの船を救おうとすると様々な動きが進みつつある。(・・・)船の存在を知り、船に関心を持つ人は少なく、目の前を通り過ぎる観光客にこの船を知っていますかと尋ねても返事はノー！この船の深い歴史を知ることもなく、立ち去っていく。「ルイズ・カトリーヌ号を救おう！船を元に戻そう！アーヘンの友より」と書いた一枚の紙切れがセロテープで貼られているのみである・・・」

そこで、1919年に造られたコンクリート運搬船が、救世軍の避難所に生まれ変わる歴史の経緯を紹介し、コルビュジエの作品としては有名ではないが、重要な作品であることを強調する。

また、日本では写真集『アジュール・フロタンの奇跡 ル・コルビュジエの浮かぶ建築 一』(建築資料研究社)が出版された。

日仏でのこうした動きが大きく繋がり、船を救済する動員力となることを心から願いたい。